

# 審 議 会 等 の 会 議 結 果 報 告 書

	課所名	教育総務課
会 議 名	令和4年度諏訪市総合教育会議	
開催日時	令和4年9月26日(月) 午前9時00分 ~ 10時45分	
開催場所	諏訪市役所 大会議室	
出席者	<p>(出席者)金子ゆかり市長、後藤慎二副市長、三輪晋一教育長、岩波健一教育長職務代理人、関茂子教育委員、玉本広人教育委員、草間良子教育委員、前田孝之企画部長、細野浩一教育次長、柳平直章企画政策課長、小林純子教育総務課長、宮阪透生涯学習課長、柿崎茂スポーツ課長、下澤淳企画政策係長、長田一彦教育総務係長、森崇教育企画係長 (計16名)</p> <p>(傍聴者) 6名 ※別紙傍聴名簿参照</p>	
資 料	別紙	
協議議題(内容)及び会議結果(要旨)		
1. 開会(企画部長)		
2. あいさつ(金子市長、三輪教育長)		
3. 議題(教育次長)		
<p>・時代の変化に即応した学校施設のあり方と諏訪市教育大綱の策定について</p> <p>(1)ゆめスクールプラン 分離型小中一貫教育開始に向けた準備について(報告)</p> <p>(教育次長 資料『ここ最近の教育政策と本政策パッケージの関係性』、『「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について」最終報告【概要】』及び『教育・人材育成システムの転換の方向性』より国の動きについて説明)</p> <p>(教育総務課長 資料 1『ゆめスクールプラン分離型小中一貫教育開始に向けた準備について』より説明)</p> <p>(2)県内先進学校(軽井沢風越学園・御代田中学校・佐久穂小・中学校)視察結果について(報告)</p> <p>(小林教育総務課長 資料 2『県内先進学校視察報告』より説明)</p> <p>(3)新しい学びと、諏訪市の学校施設がどうあるべきか(意見交換)</p> <p>(岩波教育長職務代理人)</p> <p>最初に、市長はじめ多くの関係者の尽力によって、学校のコロナ対策、いつもどおり、以前どおりとはまだまだいかないまでも、多くの活動ができるような状況を作っていただいていること、感謝申し上げる。</p> <p>また、上諏訪小学校の開設、併せて、上諏訪中学校との小中一貫教育の流れが整った。そして、それが有効に機能していることを実感できることを改めて感謝する。更なる高みを目標に、進んで行っていただきたい。ただ、小中一貫教育の良さが、中 1 ギャップの解消や異年齢交流など、評価が客観的にできにくい部分が多々あるため、アピールの難しさという面がある。もちろん、教科担任制の導入、ジョイントカリキュラム等学力向上に向けた取組も多々行っているため、小中一貫の良さを全戸配布されている、</p>		

あいプランだよりなどで、これからの対象となる地域へのアピール、周知をより一層深めていただきたい。自分が教育委員を拝命時、小中一貫教育についての研究、検討が進んでいるときであった。その際に、ゆめスクールプランという表題が決められたわけであるが、その際、前小島教育長から「ゆめスクールプランというからには、考えに制約を持たずに、自由な発想でこれからの学校を語ってほしい」という発言をいただいた。先ほどの先進校の様子などは、まさにそれに当たるものではないか。そのときの話で、諏訪市も小中一貫の学校を市の真ん中に一つ造って、全地区からみんなが集まった学校を造ろう等と本当に夢のような話を進めたことを覚えている。上諏訪小中の小中一貫教育が順調なスタートを切った。他地区でも小中一貫教育プランが進行する中、現実的な問題の一つとして、施設面の検討について進めていただきたい。小中一貫を語る中でのキーワードの一つは、施設一体型。施設一体型であるからこそ、9年間の小中一貫教育が真価を発揮できるとの認識が、最初からあった。現在、上諏訪小中は施設隣接型の一貫教育であるが、今後の南部、西部そして、東部第二期は最終的には、どういった形での小中一貫校を目指していくのか。先ほどの説明では、現状の施設における分離型小中一貫教育の開始に向けた準備を進めていく旨の説明があった。携わる市関係者、学校関係者におかれては、今後多くの苦労があるかと思うが、現時点においては、現状施設を大いに活用して、成果を上げていただきたい。そして、小中一貫教育の最終形として市内に義務教育学校3校を目指していると考えますが、国の動きや話を聞いた先進校を参考にしながら、夢のある施設一体型の学校施設を整備していただきたい。

また、四賀小学校は、一貫校への移行を含め、建替えに関しては喫緊の課題である。この点を含め、南部、西部、東部第二期に関して、建設についての検討、予算計画はどうなっているのか。先ほどの佐久穂小中においても、検討委員会の設置から開校まで8年掛かっている。早い時期からの検討委員会の立ち上げ、予算案、建設候補地の選定等に尽力いただきたい。

予測不能と言われる難しい現代社会ではあるが、莫大な費用をかけて建設するわけであるから、20年、30年先を見越した建設計画を期待したい。将来的な改装に予算をかけずに済むような柔軟な基本設計を合わせてお願いしたい。また、市内各地宅地化が進んでおり、建替えに適した用地もかなり少なくなっている。この点からも、早めの検討を希望する。

また、学校は災害時の避難場所としての活用も当然期待されている。各小中学校ハザードマップの位置付けは、土砂災害特別警戒区域として、上諏訪小学校、四賀小学校、湖南小学校、上諏訪中学校、諏訪西中学校、浸水想定区域に該当する学校として、城南小学校、豊田小学校、中洲小学校、諏訪中学校、諏訪南中学校とそれぞれの学校が関係している。施設の立地、資材の在庫と避難場所としての条件は整っているのか。以前、豪雨である中学校が避難場所になったとき、手伝いに行ったが、災害時の現場責任者として、教育委員会には荷が重いと感じた。災害対応のスキルを持った職員を配備する、該当分団から、避難支援の団員を派遣してもらおう等の対応を考えてもらえればと思っていたが、それは数年前の話。現在は新たな対応策ができているとすれば、ありがたい。

最後になるが、施設の建替えについての発言をしたが、建替え等はまた先の話であろうと思う。現在、各学校の施設の老朽化が目立っている。建替え時期との兼ね合い、予算との兼ね合い等あることは、重々承知しているが、現有施設の改善も継続的に進められたい。空調設備のさらなる整備、トイレの洋式化、手洗い設備の非接触化など、生活空間の充実をお願いしたい。卒業してからの新校舎ではなく、今在籍している子どもたちが快適に過ごせる学校、空間作りを合わせてお願いしたい。

(関委員)

私は、開校1年半の上諏訪小中一貫校の実践を踏まえ、主にソフトの面から意見を述べたい。私立ではなく、公立の小中一貫校として、上諏訪小中は、まさに新しい学びの先駆けとして、諏訪市の教育の誇れるものの一つである。今年7月に、上諏訪小中を訪問し、6年生が中学校の校舎に行き、中学の教科担任から、充実した中身の濃い授業を受けている様子を見た。しかもそれが特別な研究授業ではなく、ごく当たり前の日常の姿だったことに、とても感激した。上諏訪小中では、9年間の系統性を大切に

たジョイントカリキュラムを活かし、小中の合同教科会が行われている。これが日々の授業の質の向上に役立っているものと思う。これからの時代、多様性を認めつつ、一人を大事にしながら、でもやはり学校は子どもたちの確かな学力を身に付けるということを保障することが最優先である。来年度から始まる、南部、西部の分離型一貫教育の中核に、この上諏訪小中のジョイントカリキュラムと小中合同教科会を位置付け、オンライン、Zoom 等工夫をしながら、教材研究を通して、先生方の日々の授業力を高められるような環境づくりが、また必要かと思う。一方、時代とともに ICT の活用も始まっている。今までの教室での一斉授業とは異なる、色々な授業形態、多様化への対応も急務だと思う。諏訪市では早々に ICT 教育支援員 4 名が配置され、とてもありがたいことである。今後はさらに支援員が現場のニーズに合わせ、直接的に役立つように、勤務時間の割振りなどの細かい工夫を重ねてほしい。

最後に、ものづくり科、すわっこ学習、諏訪学についてである。諏訪市では、現在のコミュニティスクールの活動や、地域ボランティアとの連携によって、学校教育を支えていく仕組みが活発に行われている。ふるさと諏訪市の文化に触れながら、子どもたちがふるさとを良く知り、何年後かに、諏訪市に戻ってきたい、諏訪市で生きていきたいと思える、地域学習の充実をお願いしたい。「教育は人なり」という。小中一貫教育も ICT 教育もふるさと学習も、現場の一人ひとりの先生の授業、実践力の向上にかかっている。未来を担う子どもたちのために、教壇に立つ先生が、さらにのびのびとした教育活動ができるように私達大人が、皆が見守っていく必要があると思っている。

(玉本委員)

先ほど日本の動き、現状を聞いた。新型コロナウイルス感染症等、先行き不透明な時代である。仮想空間と現実空間を高度に融合させ経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会というものを作り出す Society5.0、社会情勢も大いに変化して、そして、ますます変化していくことは確かである。その中で、諏訪市としてのどのような空間をつかって行くか、大きな流れとして既に、未来創造ゆめスクールプランという形で進めているが、国が実現しようとしている社会や方向性と合わせ、整合性を取りながら、修正をしていきながらつくってほしい。

そして、国が目指しているシステムであるが、北欧の教育システムを非常に参考にしているのではないかと思う。共通するものがあるのではないかと感じる。4 年前にデンマークに視察に行った知り合いがおり、その報告を受けた。学校中に、学ぶことは楽しいと思えるエッセンスが溢れている。それから、校舎内の至る所、壁に、アルファベットや世界地図が貼られている。あらゆるジャンルの情報が校舎の中に溢れている。しかも、どれもとてもインテリアとしてかわいい。また、小学校 4 年生の算数に参加したとのことであったが、先生が教壇に立って一方的に話すというスタイルではなく、全員がノートパソコンを開き、イヤホンから流れる説明をオンライン上で聞き、一人ひとりのレベルによって違う問題に取り組んでいる。先生のパソコン画面では生徒全員の進み具合がリアルタイムで更新され、今どの子どもがどの問題を解いていて、正解しているかどうか、進み具合はどうか、さぼっているかどうかもわかる。これによって自分に合ったペースでそれぞれ授業を進められるという点。それから、そのパソコンの画面の問題のデザインもかわいく、子どもたちもまるでゲーム感覚で先生の問題を解いているとのことである。授業も生徒同士が学びのペア、2 人組で進めているそうであるが、わかる子とわからない子をペアで組ませている。わかる子はわからない子に教えてあげている。わかる子は人に教えることでさらなる理解を深めながら、人に教えて喜ばれることを感じる、自分の学びが誰かの役に立つということを体感しているという。また、学校のテストにグループ評価というものがあり、グループで一つの課題を提出させる。自分だけが成績が良くても、自分だけができてダメ。グループで何かを達成する力を養う、そういうことを大切にしている、それを目的にしているということで、これは先ほど教育次長から話があった個別最適な学び、そして一番小さな社会、協働的な学び、これら二つが両立しているのではないかと思う。

諏訪市内の小中学校にも階段に英単語とか貼ってある学校、工夫している学校もたくさんあるが、また、グループワークで教え合っているのも、実質できているところはたくさんあるかと思うが、これからも

徹底的に子ども目線に立って、学びと遊びの境界線がなくなるような、環境をつくり出すとともに、自分が世の中に必要とされる人間なんだ、自己肯定感を養う、そんな諏訪市の学びのシステムと学校の施設を構築していただきたい。ただ、これらは例えばICT教育も新校舎建設等も、中長期的な予算付けや他部局との調整は教育委員会単独で進めていくことは非常に困難である。ぜひとも市長には協力をいただいて、調整やリーダーシップをとっていただければと思う。

(草間委員)

現在、学校に通っている子どもの保護者として感じていることをお伝えしたい。先ほど視察の報告を見せていただき、個に対応できる場所が設置されていたことが印象に残る。9年間の学習の中で個別最適な学びを充実させていく一方で、クラスの授業に入れられない子どもたちの学校での学びが充実していることが大切だと感じる。諏訪市が最終的に目指す施設一体型の小中一貫校になると、9年間同じ場所に通うということになる。少人数で過ごせる場所、安心して登校できる場所を確保することで、学校へ行くことが苦しい思いではなくなる子もいるはずである。全ての子どもの好奇心や個々の興味、安心に応じた学びを実現して欲しい。

それから子どもの数がどんどん減少している中、それぞれの地区の児童会や生徒会活動が難しくなって、地域行事が成り立たず、次の世代へ伝えることができにくい状況のところもある。そうなれば地域コミュニティの拠点としての学校に果たしていただく役割は今後ますます大きくなっていく。

また、地域移行が進んでいく部活動も活動の場の一つとして役割を担ってもらえたらありがたい。忙しい先生の負担を減らせるよう、地域や社会、保護者が関わりやすい場所であってほしいと思う。

(金子市長)

色々聞いて気付いたことは、人口が減少している、高齢化している。これについてどうやって対応していこうかということである。その過程においてどんなことが起こっているかといえば、かつて大家族であったものが、中家族になり、核家族になる。子どもが一人という家庭も随分多くなり、家庭の中で、異年齢のきょうだいと喧嘩をしたり、触れ合ったりするという経験がない、一人っ子の子どもたちがいる。そういった家族を前提として、学校における子どもたちが、家庭でそういう状況にある、そうしたことに気付くべきであり、学校に期待するものが、どこからなのかということがある。

一方、社会も、戦後のあり方についても、戦後社会復興ということで、当時の技術と日本の産業の果たす役割の中で、大量生産型、いかに周りと同じレベルでみんなと協調し、飛び抜けた才能は評価されず、そしていかにみんなとできることが、同じようにできるか、そういう評価であった。そういうところが、今世界を牽引しているスマート化であったりとか、宇宙開発だったり、イーロン・マスクだとか、ビルゲイツだとか、社会をものすごく改革した。みんながそうなるわけでもないが、個々の持っている能力を花開かせてあげる、普通の社会がびっくりするような、我々凡人が気付かなかったような新たな社会を切り拓いていくパイオニアであった。木も花も、葉っぱが出て花が咲く日もあれば、花が咲いてから葉っぱが出てくる日もある。育ち方は全然違って、どんな花を咲かすかわからない場合もある。それをみんな同じような、綺麗にしてしまうということがないこと。それを考えると、先ほど報告にもあったように、学校に求められるものというのは、能力をしっかり後押しして育てて、花開かせていく、その後押しが必要である。

もう一つは社会性。共存という言葉もあったが、その二つが主かなと思う。そのときに、やはり社会がこんなに激変していることに気付く必要がある。我々がこのような学校にしたいというものと、先ほどの先進事例を参考にしたいと思ったとしても、家族や祖父母、親戚、親も学校をイメージしたときに、既に自分たちが学んだ半世紀以上も前のそれを、学校教育というものだと思い込んでいる。例えば、ホームルームのとき同じ学年の同じ年の子どもたちがクラスを構成するが、もしかしたらホームルーム自体が、1年生から6年生まで。あるいは中学生も含めて、低学年で揃えてもいい。もっと自由で、ホームルーム、家族のようなそういうものであってもいいかもしれない。クラスの壁がなくなっていていい、教室毎に、同じ学年の子どもたちが学ばなくてはいけないということではなく、それらの気付きを、今日いただいた。

学校がどんなところでありたいか、それから、先生が自由に楽しくやっていたら、子どもたちは面白くない。5.6年生で、教科担任制を取り入れた。これは先生にとっては得意分野を思いっきり子どもたちに語るということだとすれば、効率もいだろう。それからデジタルトランスフォーメーションというのが何を起こすかと言えば、先生も一人の先生が、自分の担任している30人、35人を教えずとも、パソコンを通じて面白い先生、得意な先生がいたならば学校全体が、そのクラスを見なくてもいいかもしれない。本当にもっと自由な発想があってもいいのではないかと思う。

今デジタルトランスフォーメーションの時代であり、部課長会議をペーパーレスにした。私もペーパーに依存しがちだが、会議の間画面を共有していれば、全てのメンバーがこれだけの書類を持たなくていいことが、経験しているうちにわかる。その場限りの確認であって、その後ペーパーをどれだけ使っているかという、無駄。そうしたことから何がわかってくるかといえば、机の引き出しに、どれだけ必要のないペーパーがあるかということ。アクセスして、画面で確認ができれば仕事ができる。既に、東京都内の大きな会社は、社員一人ひとりの机はない。フリーアドレス。大きな机があって、パソコンを持ってきてそこで仕事をする。それを持ち帰ればよく、それが何を言うかということ、本来の高いスペースを大きなお金をかけて会社も倉庫を持っている必要がない。そして通勤電車の満員の中で、苦しい思いをして通う必要がない。もし学校がそれでいいとすれば、先ほど施設の話があったが、学校という施設のイメージ、各クラスがあって、そこに限られた数の人を学年毎に揃えていく、そういうイメージでどれだけ施設が必要かということであつたら、ものすごい膨大な費用で建替えを認めなくては行けない。もしかしたらコンパクトなものや、あるいは今使っている施設も壁を取り除いて、内装工事をして、当面の躯体全体の耐用年数が来るまでは、有効に小中一貫校として新しい時代、新しい学びというような気持ちにもなってくる。そういう意味で今、デジタルトランスフォーメーションでもあり、それから学校のそのシステムが変わろうとしたり、そうしたものを考える時期になってきている。いつも勝手な発言をする私であるが、何かの気付きになって、それがまた新しい時代を切り拓いていけたならばとても嬉しいと思う。

(三輪教育長)

市長には大事なことを言っていたらと思って聞いていた。先ほど、玉本委員が話した、遊びと学びの境界をなくすという話。私は、これは一つとても大事なことであったと感じた。子どもたちの主体性が大事だと言いながら、遊んでいるときには子どもたちは主体性を発揮している。自分で問題を見つけて、仲間と想像しながら、その問題を解決していくということを繰り返している。一方でなぜか学校にいるときは、少し困ったような表情をしている。この辺りの問題意識をどうしていったらいいのかということ。

その中で、一つキーワードとして、教える側主体から学ぶ側主体への転換、先ほど市長も話していた、社会の中での学びをどう考えていくかということ、社会はこうあるべきだということに基づいて、学校教育があって、それから社会をつくっていく経験、小中学校でその基礎を学んでいくと考えると、教える側主体から学ぶ側主体へのそうした学びの姿、転換が必要になってくる。これは、これまで全くなかった話ではなく、そうした取組は存在している。

もう一つは好奇心の涵養ということ。ワクワクしながら好奇心を育てる。こうした事例はいくらでもある。例えば、小学校一年生は、朝顔をなぜか育てる。なぜ朝顔なんだという話はさて置き、今の朝顔は教材会社が種から全て揃えてくれて、朝顔の育て方まで説明書で全部付いているため、蔓をこう巻くとかそういうことも全部わかるようになっている。それを、敢えて説明書を取ったらどうなるのかということである。種は蒔くけれども、そのうち並んでいるところで、朝顔の蔓がお互いに絡み合う。子どもが突然朝来て、大変な事件が起きたと騒ぐ。子どもが、どうしたらいいのかと言う。しばらくそのままにしておくと、さらにぐしゃぐしゃに絡んでいき、これはどうなるんだと。次の段階で、教える側も、教えていくとどうなるかということ、棒を立てるというところに非常に労力をかける。でもそこに労力をかけるべきなのか、それとも教える側からすると、きっと教えるべき問題であるかもしれないけれども、子どもに対して、どういうふうに答えを見出すのかということに価値を置けば、少しそういう様子を見ながら、次の段階に進んでいくと

ころを考えさせることが大切である。また、朝顔の先がなくなってしまう。一生懸命探す。何者かに取られた、誰が取ったかわからない、大事件だと。朝顔の先がなくなると、私の朝顔が死んでしまうかもしれない。でもそれは、結局しばらくすると、脇から芽が出て来てむしろ取ったほうがいいのではないかという話になる。そういう新たな発見もあるわけである。そういう学びを実現するためには、学校施設でも一定の自由があることも必要ではないかと思っている。また、委員のご意見を伺いたい。

(後藤副市長)

それぞれの立ち位置からのコメントを聞かせていただいた。私の感想、思いを少し話したい。

まず前半で事務局から説明があった国が示す新しい学びへの転換、一律一様から多様性への転換ということだが、その理念は大いに賛同するところである。一方で、明治から今に続いてきた、今の学校教育が、これが大きな成果を上げたということも私は事実だと思う。そのことが今の日本の位置に押し上げたということは、これはやっぱりしっかり認識すべきこと。平成から令和の間で本当はチャンスがあったと感じている。学校教育の現場で、時代に対応したシフトチェンジのタイミングを逸してきた。ところがここに来て新型コロナウイルスのある意味おかげで、一気に進んだ。GIGAスクールはその典型。文科省も、ここが大きな転換の時期だということで、ギアが入った、少し段階が変わったんだというのが私の現状認識。私たちが受けてきた教育における学力というのは、いかに難しい学校へ行った、難易度、偏差値の高い学校へ行く。それはいかに、処遇のいい会社に入る、いかに安定した未来を手に入れるか、こういうものが、学力というものになってしまっていた。先ほど教育長の発言にもあった学ぶ力が学力ではなくて点数や偏差値が学力になってしまう。でも本当は、学ぶ、学び取る力、これが学力であるべきであったなということを感じた。

私の立場から考えなくてはいけないことは、この大きな転換を諏訪市の学校教育の現場、ゆめスクールプランを実際に推進していく現場においてどのように落とし込んでいくかということ。ソフト面は、先ほど資料1の中で説明があった分離型一貫教育のソフト面の作業の中に、ぜひ国がやろうとしている学びの転換も一緒に入れて、検討していただきたい。既にやっている部分がたくさんあると思うが、そこをまずソフト面では一緒に、一貫教育のソフト面と学びの転換のソフト面を合わせ技でぜひ進めていくべきではないかというのが一つ。もう一つはハード面。重点地区である南部地区、この施設整備、これが近々の課題。この施設整備をぜひ国が言うところの新しい時代の学び舎、今までの学校施設整備の基準や縛りから少し解放された基準に適合した新しい学び舎を造っていく。そのチャンスである。わが市のゆめスクールプランの肝、素晴らしいところは、おおむね30年後の未来をきちんと示したということにあると思う。3つの義務教育学校を造るんだという最終目標を提示したこと。だとすれば、その実際の姿を、ぜひ南部地区において示し、一つのゴールの姿を市民に理解をしてもらうということ。このことの意味が大きいと思う。ただそれには多額の経費、予算が掛かる。したがって、諏訪市の抱えている大型ハード事業とのバランスを見ながらの作業にはなる。少しくどくなるが新しい時代の学び舎を造っていく一つのチャンスだと捉えるべきだというのが私の認識である。

最後に、新しい学びだとか、個別最適だとか、この転換をしていくということを推進していく我々は、大量生産教育にどっぷり浸かった大人である。私もその典型。いかに自分の脳みそを転換するかということ、学校現場、教育委員会、行政それぞれができるかどうか、そこに掛かっているとの思いを今日は強くしたところである。

#### (4)教育大綱の策定について

(金子市長)

地方教育行政の組織及び運営に関する法律の第1条の3では、「地方公共団体の長は、教育基本法第17条第1項に規定する基本的な方針を参酌し、地域の実情に応じ、当該地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を定めるものとする」となっている。諏訪市では、平成27

年 8 月 12 日に初めて開催されたこの総合教育会議の場で、第五次総合計画 基本目標 3「ともに学び、ともに育つ、未来につなげるまちづくり」、これをもって教育大綱とすることが決定され、現在まで諏訪市の教育の基本目標として掲げてきたところである。

一方、令和 4 年度より第六次総合計画が始まったこと、それから諏訪市の教育振興基本計画も今年度改訂時期を迎えることから、来年令和 5 年度からの教育大綱の見直しを提案させていただきたい。なお、大綱策定にあたっての協議に先立ち、教育委員会が関係者・学識経験者の意見を聴いた上で素案をまとめて、そして市民の意見を反映させた原案、これを提示させていただきたいと考える。よろしく審議をお願いしたい。

(三輪教育長)

教育委員会では、ただいま市長から提案いただいたことを受けて、本日を議論のスタートとし、諏訪市教育振興基本計画策定委員会や諏訪市社会教育委員会に今後意見聴取した上で、素案を作成し、パブリックコメント等により、市民意見を反映させ、3 月開催予定の総合教育会議で協議等していきたいと考える。

4. 閉会(企画部長)

以 上